

特集：英語学習の「軸」となる『アクシスジーニアス英和辞典』誕生！

『アクシスジーニアス英和辞典』と 『ジーニアス総合英語』の連携

中邑光男



◆辞書と総合英語の連携

『アクシスジーニアス英和辞典』（AG）を編纂するにあたっては、学習者が英文法をより効果的に学べるように、『ジーニアス総合英語』（G総合）と積極的に連携させた。本稿では、まずどのようにAGとG総合を連携させたのかを述べ、次にその2つを併用することで可能になる指導例を紹介したい。

AGとG総合との連携の中で最も目に付くのは、(1)G総合に載っているモデル文をほぼすべてAGの用例として取り入れたこと、(2)G総合にあるQuestion Boxという名前のコラムをAGでも設け、辞書ならではの特定の見出し語に焦点を当てたQ&Aを掲載したことであろう。このようにAGとG総合を連携させることによって、例えば生徒がG総合で学んだことをAGで確認する場合、文法的な事項に加えてコミュニケーションに役立つ情報も理解しやすいだろう。

上記の2の工夫に加えて、G総合の文法に関する説明をAGにも積極的に取り込んだ。例えば、G総合の第13章「名詞」では、advice, fun, informationなどの9つの名詞について「抽象名詞の中には、普通名詞として使われることのない純粹の抽象名詞があり、それらは形容詞で修飾されても不定冠詞はつかない」と説明した。AGではそれを踏まえ、例えば見出し語adviceでは「adviceは[C]名詞として使われることのない純粹の抽象名詞。したがって、形容詞に修飾されても不定冠詞は付かない」という注記を加えた。

別の例では、G総合の第1章「基本動詞と文

型」で取りあげた＜SVO₁O₂＞で使われるgive型の動詞とbuy型の動詞について、AGではそれぞれ「《語順については→give動他①語法》」, 「《語順については→buy動他①語法》」と示し、語法の欄ではG総合に準ずる説明を挙げた。AG全体では56のgive型の動詞を、また32のbuy型の動詞をこのようにG総合に連携づけた。

◆AGとG総合の連携を活用した学習例

ではAGとG総合の連携をどのように活用し、学習に結びつけることができるのであろうか。ここではいくつかの例を紹介したい。

まず、生徒は、G総合で学んだ内容をAGによって深化させることができる。これがAGとG総合を使った基本的な学習方法になるだろう。

例えば、G総合の第16章「形容詞」では国名の形容詞であるJapaneseに関連してJapanese, the Japanese, Japanese peopleを挙げ、それぞれのニュアンスを説明している。AGは、G総合とほぼ同じ例文や説明文を与えた上で、we Japaneseという表現は排他的に聞こえるなどの情報を加えた。

別の例では、cannot help doingという表現について、G総合では「～せずにはいられない、思わず～してしまう」という意味であり、「この表現は主語が自分の行為をコントロールしようと思ってもできない場合に使われる」と説明した。AGではこの表現をQuestion Boxで取りあげ、G総合の内容に加えて、「…せざるをえない」という意味を表すとされるcannot help doingと

have no choice but to を取りあげ、前者は「思わず…してしまう」という意味、後者は「…以外に選択肢がない」という意味を表すと解説し、この2つの表現の違いを明らかにした。

次に、生徒は、ある語について AG で学んだことが他の語にも当てはまることを G 総合で確認することができる。多くの生徒は、ある語を辞書で調べて学んだことは、その語だけに当てはまるように感じるだろう。しかし、英語を勉強していくにつれて、同じような振る舞いを見せる単語は他にもあり、それらを整理して学習の方が効果的だとわかってくる。

例えば、AG で convenient の項を引くと「When is it convenient for you? 都合がいいのはいつですか ◆× When are you convenient? のように人を主語にはできない。」という記述がある。ここから、G 総合の第16章「形容詞」を参照すると、convenient のように人を主語にできない形容詞として、他に natural や necessary などの7語が挙げられている。

さらに、生徒は、AG 巻末付録の Typical Mistakes のうち、文法上注意すべき項目について間違いの理由を G 総合で調べることで、関連して起こるかもしれない間違いを防ぐことができるだろう。Typical Mistakes には、語彙に関する間違いに加えて、文法に関する間違いが含まれている。例えば、「彼女はお母さんに大変よく似ている。× She resembles to her mother very much. ○ She resembles her mother very much.」であり、この間違いは、自動詞と間違えやすい他動詞 resemble に関するものである。

そこで生徒に、G 総合を使い、She resembles to her mother... が非文である理由を調べさせ、resemble 以外にも approach, attend, contact などにも注意すべきだと気づかせる。もし生徒自身が resemble よりも marry を間違って使ってしまうと考える場合には、AG の Typical mistakes の項目を書きかえて、My Typical Mistakes を作

らせるのもおもしろいだろう。

最後に、生徒は、AG の「語義ツリー」にならって、前置詞などの「語義ツリー」を作ることによって、語義についてより深く考えることができるだろう。AG では on などの前置詞に対しては「イメージ図」をつけている。その図をスタート地点として、それに関連していると思われる重要な語義を選び、それらを線で結びつけていくという課題を与えるのである。

例えば、G 総合では、前置詞 on について「場所を表す on の用法」や「時を表す on の用法」を挙げ、また「注意すべき on の意味」として「同時」や「着用」などの7つの代表的な用法を示している。AG ではそれ以外にも、「付着」、「支点」、「比較の対象」、「不利益」などを挙げている。それらの語義の中で関連するものを考えさせるという課題である。生徒はふだん前置詞に特別の注意を払うことは少ないだろうが、前置詞の語義に能動的に関わることで、こういう小さなことばにも関心を持つかもしれない。前置詞は言うまでもなく試験によく出る文法事項である。

英語学習者という長距離ランナーにとり、G 総合は「地図」で、AG は実際に走る「道」にたとえることができる。AG を使い個々の単語と付き合いながら、同時に、その語の情報は文法的にどのような意味を持つのかを G 総合で確認することによって、学習者はやみくもに英語を学ぶのではなく、考えながら、効率的・能率的に学ぶことができるだろう。

このように考えると、AG と G 総合の本当の意味における連携は、学習者の頭の中で起こるべきだと思えてくる。AG 編纂において AG と G 総合を連携させたのは、生徒のこの連携の作業を少しでも手伝うためであったと気がつくのである。AG と G 総合の有機的連携により、生徒が、語彙にも文法にも強い学習者になることを念じている。

(なかむら みつお・関西大学教授)